

「心理主義」の流行とカウンセリング・心理療法の是非をめぐる問題

島崎 隆(季報『唯物論研究』第100号、2007年)

現代の日本では、実にさまざまな分野で「心」の問題が大きくクローズアップされてきている。しかし、こうした「心理主義」の傾向には、実は大きな問題も含まれている。以下では、「心」の問題がいま、どのように現れているのかを概観し(第一節)、小沢牧子らを中心に、そこで現れる「心理主義」の傾向への批判を紹介・検討する(第二節)。さらに、日本で「心理主義」が流行する社会的基盤を検討し、そこに潜む困難さを解明する(第三節)。そして、小沢らの提起する「心理主義」批判をあらためてどう受けとめたらいいいのかを検討し、カウンセリングや心理療法の是非について議論したい(第四節)。そのなかで、とくに小沢らが批判する、「心理主義」流行の中心人物である河合隼雄および「こころのノート」に触れたい(第五節)。ところで小沢らは、河合に反発するあまり、カウンセリング、心理療法の問題点を一方的に指摘するよう見える。もちろんこれはこれで重要だが、正しく理解され、実践されるカウンセリング、心理療法は依然として必要であろう。そうすると、いかにすれば、心理療法などを、その限界の指摘とともに、適切に位置づけられるのかが問題となる。この報告では、その点への展望を最後に出すこととする(第六節)。

一 いま「心」の問題はどうなっているのか?

「心のケア」という表現が広く知られるようになったのは、六〇〇〇人以上の犠牲者を出した阪神・淡路大震災(一九九五年一月)であるといわれる。従来また、PTSD(post-traumatic stress disorder 心的外傷後ストレス障害)などという用語もしばしば使われてきた。さらに、教育問題・若者の問題と絡んで、不登校・引きこもり・いじめの対象者、「ニート」と呼ばれる人々への「心のケア」やカウンセリングも常識化してきた。

ところで、かなり以前から、いまやモノから心への時代になったといわれ、心の癒し、ヒーリング、セラピーがはやり、「精神世界」を求めようとする傾向が人々のあいだに存在した。そして、オウム真理教による地下鉄サリン事件(一九九五年三月)や神戸の酒鬼薔薇聖斗事件(一九九七年)などをきっかけに語られた、若者の「心の闇」の問題。この酒鬼薔薇聖斗事件のあとに、子ども、若者にたいする「心の教育」の必要性が強調された。さらに、長期化した不況と表面上の「好景気」のもとで、長時間労働、ワーキングプア、リストラ・失業・就職難、そのほか家庭内暴力(DV)など、種々の困難を抱える人々の心の問題も指摘されている。この点で驚いたのは、大きな本屋の心理学コーナーに、最近うつ病に関する本が多数並んでいたことである。最近、成果主義の導入や管理職の若年齢化と関わって、企業で三〇代に一番うつ病、神経症などの心の病が多いとされている*1。

さて、目を教育の分野に向けると、最近の君が代・日の丸の問題と関わって、愛国心の強制や、準国定教科書として小中校に配布されている「心のノート」にまつわる問題など、人間の心を大きくクローズアップする傾向が広まってきており、とくに教育現場で、強く矛盾をはらんだ様相が現れている。この点と関わって、二〇〇六年一二月に教育基本法も改悪されてしまった。政治絡みの問題でさらに指摘すると、石原東京都知事は、二〇〇〇年八月に「心の東京革命」を発表し、「心の東京ルール」として、「毎日きちんとあいさ

つする」「他人の子どもを叱ろう」などのスローガンを提起した。

こうして他方、ストレス解消のために、人々のあいだで音楽など一連の癒しグッズが人気を呼び、「癒し系」などのことばも登場してきた。そしてまた、臨床心理士やカウンセラー志望の学生もふえてきており、心の治療や癒しの問題はいまや大きく社会的に注目されてきている。

目を世界に転じてみよう。「国境なき医師団」の『ニュースレター』第七九号によれば、彼らは紛争の続くコンゴで、基礎的医療、栄養治療、負傷者の手当てなどと並んで、「心理的ケア」をおこなっている。パレスチナでも、「心理療法プログラム」が実施されているが、PTSDよりも、不眠症、不安障害、抑うつ障害などに悩まされている人が多いとされる。最近のスマトラ沖の地震・津波災害では、インドネシアのアチェ州において、やはり「心理療法プログラム」が実施されており、担当者は、「私たちは、つらい体験や自分のあまりに強い感情に混乱している人たちの話に耳を傾け、それを解きほぐす手伝いをしています」という。このように、心のケア、癒しの問題は、全世界的に広まり、対応がなされているといえよう。

二 社会と人間のありように浸透する「心理主義」とは何か？

第一節で示された心のありようを強調する立場は最近、「心理主義」と呼ばれている。心や意識・精神というテーマはそれ自体重要ではあるが、これから見るように、実はここには、大きな問題がはらまれている。そもそも「心理主義」とはどう定義できるのか。小沢牧子は中島浩かずとの共著『心を商品化する社会』で近年、社会と人間のありように浸透しつつあるこうした「心理主義」について、次のように定義する。

「ここでいう心理主義とは、人の状態や行動または社会現象を、臨床心理学的な観点から人間の内面のありように還元して解釈し、説明し、問題を『改善・解決』しようとする立場である。またこの心理還元的立場を重視する態度を含む。心理治療・カウンセリングは、もちろんこの範疇に入る。」*2

ここで「改善・解決」にかぎかっかがついているのは、これから紹介・検討するように、この「心理主義」的アプローチが人間の抱える問題をけっして本当に解決しないと、小沢が考えているからである。小沢は、「なぜみんなが心理学に関心を持つか」というと、ひとりで苦しいからなんですよ」という若者のことばを取り上げ、「心理主義の個人還元的性質」（小沢・中島 3）を指摘する。すなわち簡単にいうと、「心理主義」とは、基本的に、人間を取り巻く社会的現象を個人の「心」の問題へ還元する立場である。「心理主義」とは、個人がばらばらに疎外されているという現象を大前提として発生してきたといえる。哲学的に言えば、現実の矛盾や問題を心や意識のありように解消する立場は、一種の「観念論」とみなされよう。

さらに小沢は、前著『「心の専門家」はいらない』で、とくに若者の「カウンセリング願望」に触れる。これも「心理主義」の台頭と同根の問題であろう。

「カウンセリング願望の背景には、極限化する情報・消費社会を浮遊する個人の、よるべない心情が存在している。この心情はしたがって、カウンセリングとは限らず、宗教とも独裁性とも結びつくものであるだろう。透明なカプセルに一人ずつ閉じ込められ、外から値踏みされるような気分が、世の中を支配している。自助努力、自己責任、個性の育成、

規制緩和、自由競争、グローバル化、まして負け組勝ち組などの言葉は、むきだしの能力主義の進行を意味している。」*3

「宗教」や「独裁性」というと、私はやはり、あのオウム真理教事件を想起せざるをえない。「ほんとうの自分さがし」の流行にしても、カウンセリングがそれを発見させてくれるのではないかという願望が結びつくだろう。

さて中島は、小沢とやや異なる角度から「心理主義」の危険性を論ずる。

彼は、「予防的まなざしの心理学」（小沢・中島 140）ないし「予防モデルの心理学」（小沢・中島 143）が現代社会に浸透してきているという。これはいわゆるリスク管理の問題と関わるが、対象が不登校の生徒であれ、労働者であれ、問題を起こす前に早期発見するという態度で、人々の心を日常的にチェックするという方法である。たしかにいまは、「普通の」子ども、「よい」子がいきなりキレて事件を起こす時代である。ここには、危機管理マニュアルをどう作るかという問題も関わってくるだろう。文科省も二〇〇一年の高速バス乗っ取り事件をきっかけに、若者の「心のサイン」を見逃すなどということを強調しはじめたという。だからいまは、学校であれ、企業であれ、構成員の「心の過程」に予防的に踏み込む必要が出てくる。こうして、学校でのカウンセリングも問題児のみではなく、「普通の」生徒にたいしても、最近無口になったとか、給食を残すようになったとか、細かく事前のチェックをおこなうようになる。これは企業でも同じで、労働者が自己管理するために、「予防的まなざし」をもつことが要請される。

以上の傾向は、大学に勤める私としても、人ごとではない。大学執行部からは、ゼミ学生の「心のサイン」を見逃さないように、チェック項目の表が配布されるし、教師はすべからずカウンセリング・マインドをもつべきだとしばしばいわれる。大学でも提起される各種のハラスメントの問題も、この「心理主義」の傾向と無縁ではないだろう。中島もまた、こうした「心理主義」の傾向のなかに、一見、現代社会の変貌にとまなう必要なことと思わせつつも、微妙なからくりにもとづく危険な問題を見つけている。中島の批判は小沢と大体同じで、学校でいえば、学校や教師への不満、さらに教育体制の批判など、生徒の「具体的問題提起」（小沢・中島 163）がどこでも受け止められなくなり、問題が心のなかに閉じ込められるということである。私見では、法人化後の大学においても、法人化にとまなう矛盾と軋轢が、いつのまにか学生、職員の心理問題やカウンセリングの必要性へと転換されてしまっている。

さらにまた、こうした「心理主義」的傾向の問題点ないし危険性は、多くの論者から指摘されている。たとえば、岩谷良恵は社会学的見地から、やはり小沢の主張に同意しつつ、アメリカで生まれてきたカウンセリングが、実は金稼ぎと戦争をどうスムーズにおこなうかという問題意識から、職業選択、社会への適応のために生まれたとさえいえる、と指摘する*4。さらに精神医学者で、教育問題などにも強い関心をもつ野田正彰は、次のように鋭く指摘する。

「伝統文化の強調と道徳教育と心理主義が三位一体となって、児童・生徒の国家への統合が急激に進められている。三つの傾向— 心理主義的ナショナリズムと呼ぶことにしよう — は以前から進められていたものの、三本を一体として教育政策とすると宣言したのは、一九九九年六月の中央教育審議会答申『新しい時代を拓く心を育てるために— 次世代を育てる心を失う危機』であった。」*5

さらにまた下司晶は、教育学的見地から、「21世紀日本の構想」懇談会の座長であり、教育改革国民会議委員や中教審委員でもあり、「心のノート」作成協力者会議の座長であった河合隼雄の立場、さらにそれと密接に関わって、心理学を利用する「精神分析的教育学」を批判する。そして、「『教育』は『治療』ではない。全国規模で実施される臨床心理士によるスクールカウンセリング、すなわち学校に心理療法を導入する試みは、おそらく世界に例を見ないものだろう」*6と指摘する。もしそうであるならば、日本の教育における「心理主義化」は世界で稀なできごととなるだろう。

三 「心理主義」流行の社会的背景

なぜこのように、「心理主義」が大きな傾向をもち、一見それが必然的であるように見えているのだろうか。問題をさらに広く、現代社会の根本的状況から眺めてみよう。さて、心理的悩みやノイローゼ、うつ病などは、人がいて社会を構成しており、そこに人間を疎外し、抑圧・差別する要因があれば、つねに現れるものである。さきに述べたように、「心理主義」の基礎に一種の「観念論」があるとすれば、それと対立する「唯物論」では、問題を発生させる物質的・社会的条件を重視し探究するだろう。この点では、とくに社会的矛盾が激化すると、極度の精神的困難に陥り、自殺をする人の数も多くなっている。その数は一九九八年以降、つねに三万人を上回っている。

日本でいえば、社会や家庭における極度の非人間的状況は、第一節で言及した通りである。さらに付加すると、地域からの家庭の孤立化、家庭内の家族成員の孤立化、医療・年金・介護の問題、学校での依然として残る受験勉強や競争主義・管理主義の体制の問題、さらに新自由主義由来の学校評価制度の導入の問題など、枚挙にいとまがない。そうした悪条件の積み重ねが、人々の心にストレスをかけていることはまちがいない。この点では、親子、夫婦、兄弟姉妹など、身近な家族関係のなかでいじめ、傷害、殺人事件が最近、増大している。

だがそこでは、そうした矛盾と困難を発生させている「敵」の姿がなかなか見えにくい状況にあるのではないだろうか。もちろんそこでは、一部、批判的な市民運動などが活発化している。だがそれでも、現代社会の困難さとして確認すべきは、家庭であれ、学校であれ、企業であれ、人間が生きる場が何か複雑になり、閉塞的な雰囲気広がり、批判すべき敵の姿（根本原因）がなかなか見えないという状況にあって、問題が心理ないし精神のストレスを増大させる方向におのずと流れてしまうということが一般的に指摘されるだろう。ストレスが人々の心にたまり続けると、一触即発的に、または執拗に他人への攻撃へと向かう。要するに、健全な意味での捌け口が見つからないのだ。この意味で、現段階の日本国民のストレス、イライラ感はこの一〇年ほどで相当のものになっていると感ずる。

この点では、一九九〇年代の「学校の病理」の噴出（いじめ、生徒間暴力、高校中退、勉強嫌など）に関わって、教育学者の佐貫浩が以下のように指摘することなどは共感できる。「それは第三次の学校への反乱であるといってもよい。しかし、それはもはや『敵』に対して攻撃するという形を取ることなく、無差別に身近な他者に向かい、同時に人格の内側へと内向し、まさに人格と人間性の危機の噴出という形を取るに至った。」*7この攻撃対象のなかには、自傷行為に見られるように自分自身もはいいり（リストカットやいじめによる自殺など）、この内向化する傾向の極限に「心理主義」が生じたと見られること

もできるだろう。

ところで、精神科医の香山リカは『生きづらい〈私〉たち』で、最近、「解離性障害 d dissociative disorders」という症状が、若者を中心に顕著になってきているという。この症状は、「多重人格」に明示されるように、自分が分裂し、いくつもいるように思われたり、自分と世界の間の実感がわかなかつたりするという「離人症」のような自己不確実性の状態を意味する。「このように、心の全部、あるいは一部が、本来持つべき連続性やまとまり、いわゆる『統合』を失っている状態を、『解離』と精神医療の世界では呼んでいるのです。」*8たとえば、リストカットをして手首の傷がそれを明確に物語っているのに、その記憶がはっきりしないという場合も該当する。またリストカットをするとき、その痛みをまったく感じないことがあるという。

香山は「先のことが考えられない」「自分は何がやりたいのか、何に向いているのかさっぱりわからない」という「解離的な人々」がフリーターになりやすいという*9。彼女は結論的に、解離性障害、境界性人格障害などはいまや単に「病気」という範疇を超えて、「現代人の本質的な問題」*10だといえるかもしれないと述べる。ある意味で、「敵」の姿が見えづらいという問題とも関わる議論であろう。私見では、問題解決の展望が見えず、不満を合理的に発散する手段をもてないために、ストレスを増大させた結果、国民的レベルでこうしたタイプの人間が増えてきたものと思われる。

この展望という点でいえば、かつては社会主義・共産主義が資本主義体制にたいするオルターナティブであり、希望の星であった。だが、こうした過去の発想は、ソ連・東欧の「社会主義」崩壊後、国民のあいだで衰退している。人々は社会主義に悪いイメージをもったままである。逆にいうと、オルターナティブとしての社会主義（マルクス主義も含めて）を、もう一度きちんと批判的に総括し、再提起することが必要ではないか*11。

欧米でも精神的病の問題などは深刻なものがあると思われるが、それにしても、日本の状態は欧米と比べて、特異な状況にあるといえるのではないか。たとえば、欧米では、政治問題などで、大きなデモがしばしばおこなわれる。若者たちもそれに積極的に参加する。日本では、小規模のデモならたびたび見られるが、そうした国民規模の大規模なデモはついぞ見られない。最近、フランスの若者たちが、大規模なデモによって、若者向けの解雇法案を撤回させたことは記憶に新しい。日本の若者・学生たちも、高額の授業料問題、ワーキングプア、フリーター問題など、大きな困難を抱えているが、抗議の運動などが盛り上がらないのはなぜなのか。若者たちもスポーツ観戦やファッション関係では群れて自己表現するが、政治関係ではほとんどさっぱりである。このからくりをきちんと解明しないかぎり、大きな国民運動へとは発展しない。同じ東アジアでも、韓国はもとより、社会主義・中国でもけっしてそうではないということは、興味深い現象である。その意味で、社会・文化・心理の問題を横断して、日本の社会問題の困難さをさらに解明すべきであろう。

実際、問題が根本的に解決できないとしても、欧米のように、日本も一〇万規模のデモやストライキがときおりおこなわれ、学生運動・政治運動・労働運動も活発となり、自分たちの共同の力が大きな国家権力さえも動揺させられるという「愉快的」できごとがしばしば体験できれば、精神的状況もおおいに違ってくるだろう。

こうして、日本社会では多くの局面でこれだけ問題が噴出しているのに、なかなか展望が見えず、国民は自分たちの生活を破壊している、その当の小泉前政権に希望を託しつつ

けた。ここでは、批判側も戦後政治の現段階で、総合的な自己点検を迫られているのではないだろうか。戦後の高度経済成長期以後の現時点における現代社会の変貌のもつ困難さをしっかり把握することが先決問題であるように思われる。

四 小沢・中島の反「心理主義」をどう見るか？

以上の現状認識を批判的に確保しつつ、さらにここで、小沢・中島を中心とする反「心理主義」の行方を見よう。小沢らの結論は、家族や地域内での日常生活におけるコミュニケーションの回復が大事であり、さらに、現実生活上のケアが基本であり、人びとが安心して暮らせる生活条件の確保こそがまず望まれる、ということだ。現実生活からあえて「心」を切り離し、そのみを縁もゆかりもない専門家に委ねるということは、いろいろな意味で問題をはらむということである。「周囲の人びとの対応や関係のありようを抜きにして『発端の衝撃的なできごと』のみを取り沙汰すれば、症状は個人のなかに閉じ込められ、周囲の不適切な対応は問題のそとに括りだされてしまう。」(小沢 174)

彼らによれば、「心の問題」には、身体の問題と異なり、スペシャリストは存在しえないという。たしかにこの点では、身体に関する病気については、無理を避けて、身体のもつ自然治癒力に委ねればいだろう。だが、「心の問題」については、現実が劣悪なままでは、そうした自然治癒力がおのずと現れるとは限らない。この点では、個人の生活全体の回復への試みがコミュニケーションを通じて意図的に求められる。彼らによれば、こうして、むしろゼネラリストの視点が要求されるのであり、この点で、親や看護婦、教師など、人間全体を扱うゼネラリストの役割が重視される(小沢 93 以下)。

さて以上の意味で、小沢・中島による「心理主義」の風潮の危険性の指摘、およびそこから展望の提起は、おおいに参考となった。だがそれでも、専門家による心理分析や、カウンセリング活動そのものが無意味化されるということはないのではないか。この点で、「心理的な問題がネックとなって就職しない若者たち」の心理分析を試みる臨床心理士・矢幡洋のアプローチや、みずからの治療経験を基礎として、カウンセリングや心理療法の必要性を述べる精神科医・町沢静夫の立場は参考となる。八幡は、「未就労の問題は、若者の就職が困難になっているという政策の貧困や、働く場所を魅力的なものにすることを怠っている企業や、適切な職業意識を育成していない教育に重要な問題があります」*12と確認しつつ、こうした若者の心理的タイプを、個性的・積極的タイプ(本当に自己実現できる仕事が見つからない)と消極的タイプ(社会に出ていこうとする意欲に乏しい)に区分したりし、とくに若者の心理と行動のパターンの問題点を細かく指摘する。

さらに町沢は、いわゆる不登校(彼はこれを「学校恐怖症」というべきだとする)などの問題を取り上げ、「学校恐怖症は社会問題の投影図」*13であるとみなし、ここに偏差値重視などの画一的な価値観があり、それに両親などが巻き込まれていることを指摘する。だがそこから、彼は、カウンセリング、心理療法などがこの社会問題から目をそらす役割をもつという批判はしない。彼はここで、精神科医として、子どもが不登校から立ち直るために、本人や両親にアドバイスを試みるのである。とくに不登校問題でいえば、彼は「いつまでも保ち続ける幼時的な万能感」*14など、若者の精神の幼弱性を指摘し、とくに「母子分離」*15を成功させることを重視する。

町沢の考えと方法がどの程度正しいかはいまは問わないが、いずれにせよ、不登校問題

は、子どもが両親から自立して、大人になる過程で発生した問題であり、ある意味で大人がつらくとも、適切なかたちで引き受けなければならない問題である。問題をすべて社会に帰しても、社会のなかで生きていかなければならない本人が他人とコミュニケーションでき、社会と折り合い、社会を担えるだけの力を早晩もてなければ、安定した解決にはならない。そして社会は、そう簡単には変わらない。実はここには、人間のあるべき、望ましい姿を構想するという意味で、現実批判をおこなう側で現在、重要な論点の別れがあるように思われる。もちろんここで、町沢は、本人と周囲の人々の心と行動を変えていこうとする方向性を主張する以上、小沢らが批判する単なる心理の操作だけをおこなおうとするわけではない。

したがって、人間の悩み・苦しみの根源である社会的疎外や抑圧・差別の認識とカウンセリングや心理療法を両立させるという視点がここで開かれるだろう。

さてここで、もう少しつっこんで、小沢らが批判する、「問題をずらす技法」（小沢 72）としての、誤ったカウンセリングとはどういうものか、具体例を挙げて考えよう。というのも、素人には、カウンセリングの中身が実際にどういうものかはわかりづらいことだからである。「問題をずらす技法」を用いるカウンセリングでは、登校拒否の問題も、心の治癒によって学校へ復帰させること自体が目指されるが、そこにある学歴社会や競争や評価重視の問題などの客観的社会問題がいつの間にか消失するといえよう。

さて、小沢は以下のような実例を挙げる（小沢 135）。

それは、ある女の子（A子と呼ぶ）、小学校三年生の一人っ子のケースである。A子は不登校となり、家族にイライラし、暴れまくる。これにたいしカウンセラーは、「不登校」と「暴力」が勝手にA子のなかにはいつてきたと考えさせる。A子は悪くないのに、暴れん坊の「いらいらさん」が悪いとみなし、行動を人格から切り離す。これは、問題の「外在化」の技法と呼ばれる。暴力などは、悪さをする害虫のようなものなのだ。

そこでカウンセラーは、ある儀式を提案する。暴力菌の絵を書かせて、それにたいし、「暴力菌、A子から出ていけ」という儀式を家族全体に提案する。これは一種の悪魔払いの儀式のようなものだ。治療を受けて一カ月足らずで、学校に復帰。一年後でも、前向きにすごしているという暑中見舞いが届き、「みごとな成功例」とされる*16。

いままでの展開のなかで明らかのように、こうした技法が一定程度効果を挙げるとしても、それが本人の精神的成長（現実対応能力）のきっかけにならないかぎり、一時的なものとして評価できるだろう。

五 河合隼雄の微妙で危険な役割と「心のノート」の問題

ここで問題を、小沢らが執拗に強く批判する河合隼男らの臨床心理士養成グループのあり方に目を向けよう。河合が日本臨床心理学会を代表し、「心の専門家」としての臨床心理士（これは単に、類似の資格のなかの一民間資格にすぎない）の養成資格制度を推進してきたのにたいして、小沢、中島らは日本社会臨床学会を立ち上げ、河合らに対抗して、「心理主義」流行の危険性を強調してきた。この点で、彼女は『「心の専門家」はいらない』では、河合を名指して厳しく批判し（小沢 66 以下、113 以下）、『心を商品化する社会』では、第三章で「心のノート」の危険性を指摘している。そして従来、「心のノート」は厳しい批判にさらされてきた。というのも、カウンセリングや心理療法に含まれる

問題は、現実には、広く現在の教育問題のありようにつながっており、そして河合こそ、教育の領域を中心として、「心理主義」流行の一大震源地であるからだ。河合が日本の教育の方向性について果たしている役割は無視しえないだろう。

ところで、「心理主義」の広がりや教育問題の領域で考えると、一方で、強制を伴うという意味での、いわばハードな現れとして君が代・日の丸問題があり、他方で、ソフトなカタチでの現れとして、「心のノート」の問題が見られるだろう。河合が関わるのは、直接には後者であると思われるので、前者の君が代・日の丸問題については、割愛したい。あえて一点だけ言及すると、東京都の教育委員会が、君が代斉唱のさいに起立しなかった教師にたいして、「先生方がどのように考えるかは自由です。しかしそのことを起立しないなどの行動に表すことは当然制限されます」*17と説明することはまったくナンセンスであり、このように説明できる当局の思想性には慄然とするものがある。というのも、「内心の自由」は適切なかたちで外部に表現されなければ無意味であるから*18。

さて、いわゆる「心のノート」が準国定教科書として二〇〇二年以後、小中学校にうえから押しつけられたことの危険性は、すでに多くの人から指摘されてきた*19。そしてそこに現れている傾向がまさに「心理主義」といわれるものである。受験勉強体制の維持や細かな校則の規制による生活スタイルの管理に加えて、子どもの心まで管理することによって、管理教育が徹底化し完成されるだろう。さて、河合の考えと関連させつつ、以下、問題を簡潔に「心のノート」に絞ろう。

「心のノート」は、小学校と中学校に配付された「補助教材」であるが、検定もなく文科省から強制された準国定教科書であり、その作成経過そのものがまず異様である。野田はこれを「非合法国定教科書」と呼ぶ*20。「心のノート」には、「著作権所有・文部科学省」とあるだけで、著者の名前がいつさいない。これもまた異様である。だが、教師用のマニュアルである「心のノート・活用のために」には、「作成協力者」の名前が連ねてあり、「作成協力者会議委員」のなかに、座長として、文化庁長官・川合準雄の名前があがっている（さらにJT生命誌研究館副館長・中村桂子も含まれる）。こうした道徳の押しつけは、「学校は道徳を教えることをためらわない」と主張する教育改革国民会議や、それを受けて「新しい時代を切り拓く心豊かでたくましい日本人」をメインスローガンとする中央教育審議会の方針の実現である。

「まえがき」に、「『心のノート』は、児童生徒が身に付ける道徳の内容を分かりやすく表したものであり、児童生徒が自己の生き方について考え、自ら道徳性をはぐくむためのものである」*21とある。したがってこれは、いわゆる道徳の教科書なのである。全編パステルカラー調イラスト満載の、きれいなこの本をすこしのぞけば明らかなように、そしてたしかに心理学者の河合が指揮したことに示されるように、ここでは道徳がみごとに「心理主義」化されてしまっている。道徳教育を専門とする者からすれば、イデオロギーは別にして、ここでの描写はおおいに違和感を感じるのではないだろうか。小沢は「心のノート」を「徳育と心理学の結合」（小沢 88）と名づけるが、適切な表現であろう。

ここで詳細に「心のノート」の内容を検討できないが、自分の身の回りのことから、他人との関係、自然、宇宙や崇高なものとのつながり、集団、わが国というマクロ的なものとのつながりまで、同心円的にテーマを広げるなかで、生徒たちに考えさせたり疑問を抱かせたりすることなくして、ひたすらイメージ的に作者の意図をソフトに刷り込ませる結

果となっている*22。これはまさに、道徳の「心理主義」化であり、教育へのカウンセラー的・心理療法的手法の過剰利用である。唯物論・観念論という図式でいえば、「心のノート」は、心というものを周囲の複雑な状況や社会関係から切り離して問題にした点で、鱒坂真の指摘するように、「旧い観念論の立場の踏襲だ」*23といえるだろう。以上で、簡単ながら、「心のノート」に見られる「心理主義」の危険性についての指摘を終わる。

六 カウンセリング、心理療法の位置づけの問題

小沢らが執拗に批判するように、たしかにある種のカウンセリングや心理療法が現実の問題や矛盾から目をそらせるという危険な役割を果たすということは十分にあるし、私は実際、こうした「心理主義」が社会への批判と変革の力を人々から奪っているのではないかと確信している。さらにまた、河合に見られるような、とくに教育にたいする危険な役割は批判されなければならない。だがここで、カウンセリングや心理療法そのものの特質ないし独自性を把握すべきであろう。やはりこれは、ひとつの限定された専門分野であり、問題が現実の矛盾から発生するとしても、やはり心の領域で問題を設定することとなる。だからある意味で、こうした方法が基づく心理学には人間理解の点で、もともと限界があるといえよう。

以上の点でいえば、心理学がある種、「内感 empathy」*24を用いるということは必要不可欠である。カール・ロジャーズの非指示的療法によれば、これは、他者になりきってしまう「同情」でもなく、さらに他者ととも感ずるという意味での、情緒的分かち合いである「共感 sympathy」でもない。ここに心理療法の独自性があるだろう。「内感」の理解はむずかしいものだが、相手の思考や感情の世界にはいりこみ、その世界をあたかも自分の世界のように把握するものとされる。だが、おそらく療法者は、患者の心の世界にはいりこむさい、自分の考えや治療の方向性を放棄はしないだろう。それが欠如すれば、彼は治療者の意味を失うからだ。そしてその唯一の目的は、クライアントないし患者を現場である社会へ復帰させることだ。

こうして、心理療法には、そもそもひとつの不可避なディレンマがある。それは、現実の問題や矛盾の解決そのものを展望するのではなく、むしろ心内部を問題とする。ある意味で問題を現実から心へと意図的に移すのであり、そこに一種のズラシがおこなわれる。そこでは、心の問題を生んだ現実問題の解決そのものへと患者を直面させることは、通常おこなわれないだろう。だが、人々が生きていけないような非人間的な社会からやって来た者を、また現実で生活できるように復帰させることは、いいことなのか、悪いことなのか…。戦場では気が狂うほどになるのはむしろ正常であろう。戦場に復帰させて、殺人的な戦闘行為をそれほど抵抗もなくおこなえるようにさせるカウンセリングや心理療法があるとすれば、それは罪ではないだろうか。小沢らが提起したカウンセリングや心理療法の問題点は、ここに存するだろう。

はたして、現実の問題から目をそらすのではなく、だが心の問題を的確なかたちで対象とする、自己批判的な第三の心理療法は存在しえないのか。私はここで、あるべきカウンセリングや心理療法の方向性を、その基礎づけの問題も含めて、以下のかたちで展望して稿を閉じたい*25。

(1) カウンセリングや心理療法のなかには、小沢らが描くように、現実には発生する問題にたいして、それを一時的にごまかすように心理を操作するものもあるだろう。だが本来あるべき姿のそれは、生活主体としての個人が現実世界のなかで何とか建設的に暮らせるように、心理のみでなく、行動と生活の全体（すなわちライフスタイルの全体）を変換させるものであろう。この点で私は、森田正馬の切り開いた森田療法（森田理論）、およびそこから出発した自助グループである「生活の発見会」の取り組みに注目したい*26。

(2) 広義の心理学のなかには矛盾をはらみ、人間を疎外する社会構造と、個人の心に内在する問題を有機的に結合する「社会心理学」という分野がある。これもまた、ある意味で、カウンセリングなどのディレンマを超える視点をもつ。たとえば、エーリヒ・フロムは、『自由からの逃走』の「付録」で、社会的発展を心理的要因と社会的要因の交互作用という視点から説明し、その交点において「社会的性格」という概念を構築した*27。ここで人は、社会的視点を失うことなく、心理的問題に取り組むことができるだろう。このなかで、心理の問題から発して、社会への批判的見方も獲得できると期待される。

(3) カウンセリングや心理療法の問題を、単に心理の問題だけに限らず、もっと広く人間全体のありようへと拡大して考えることが可能である。この点では、とくに哲学が幅広く人間全体のあり方を探究する以上、心理療法の問題意識を拡張した「哲学カウンセリング」という分野が注目される。哲学においても、古代ストア派やエピクロス派などはセラピー的であり、また現代では、ウィトゲンシュタインの哲学が、社会変革的というより、セラピー的となっている。欧米では、こうした「哲学的実践」の伝統があり、ピーター・ラービはそれを集大成した。ここでようやく、問題を心理へと縮小したり、問題をずらすことなく、人間いかに生きるべきかという世界観の問題へと拡張できるだろう*28。

(4) 単にカウンセリングなどの体制を充実させるのみではなく、さらに積極的に、高校などの授業の一環として、心理学や哲学の教育をおこない、人生とは、世界とは、人間とは、などの大問題をじっくりと考えさせるべきである。私の知るオーストリアのギムナジウムでは、宗教教育のほかに、高校二年で心理学を、高校三年で哲学をじっくりと教えており、人間の心や感情の問題、発達心理学や精神病理の問題について（以上、心理学）、さらに広く哲学的人間観や世界観・自然観、また倫理や価値観について（以上、哲学）、生徒たちに議論させつつ考えるように計画されている*29。受験勉強的頭脳では、心の問題に対応できないのは明白である。

*1 「カウンセリング」と「心理療法」には、一応の区別がある。後者は何らかの精神的障害を抱えている人を対象とするが、前者の対象は「病人」ではなく、一応日常生活は何とか送れているが、それでも心理や生活の面で他人の助けを必要とする人々である。だが、この区別は絶対ではないだろう。

*2 小沢・中島『心を商品化する社会』洋泉社、二〇〇四年、一七頁。この著作の第一章から第三章までは小沢が、第四章から第六章までは中島が執筆している。この引用箇所は、小沢の執筆である。以下、（小沢・中島 17）のように、本文中に記す。

*3 小沢『「心の専門家」はいらない』洋泉社、二〇〇四年、三九頁。以下同様に、本文中に（小沢 39）と記す。

*4 岩谷良恵「カウンセリング志向における『世界疎外』を超えるために」、唯物論研究協会編『唯物論研究年誌』第一〇号、二〇〇五年、三二七頁参照。

- * 5野田正彰「『心の教育』が学校を押し潰す」、『世界』二〇〇二年一〇月号、八八頁。
- * 6下司晶「教育言説の心理主義化に抗して」、『情況』二〇〇五年七月号、一〇五頁。
- * 7佐貫浩「戦後社会構造の変化と教育の転換」、『経済』二〇〇五年三月号、六一頁。
- * 8香山リカ『生きづらい〈私〉たち』講談社、二〇〇四年、四五頁。
- * 9同上、六一頁以下。
- * 10同上、一三九頁。
- * 11この点からすれば、アメリカの新自由主義路線に反対する中南米諸国のなかで、ベネズエラのチャベス大統領が、明確に社会主義路線への確信を深めていることが注目される。「私は、資本主義は、その資本主義内部からは乗り越えられないであろうということを付け加えたい。資本主義モデルを真に乗り越えるのは、社会主義モデルを通じてだけである。」（新藤通弘『革命のベネズエラ紀行』新日本出版社、二〇〇六年、八四頁。〇五年一月の世界社会フォーラムでの演説）
- * 12矢幡洋『働こうとしない人たち』中公新書、二〇〇五年、四頁。
- * 13町沢静夫『なぜ心が病むのか』PHP文庫、一九九五年、一七八頁。
- * 14同上、三三頁。
- * 15同上、一七五頁。
- * 16小沢は、もうひとつ、詳細なカウンセリングの実例を挙げていて、興味深い（小沢 102以下）。
- * 17この問題がいかに理不尽なものであるかについては、野田正彰『させられる教育』岩波書店、二〇〇三年。法律的観点からきわめて説得的に論じたものとして、大川隆 司『国旗・国家と「こころの自由」』高文研、二〇〇五年。
- * 18柿沼昌芳・永野恒雄『心と身体を操られる子どもたち』批評社、二〇〇五年、一二 四頁参照。同書は、心だけの問題ではなく、心と体や身体儀礼とのつながりに総合的に焦点を当てており、重要である。心だけを切り離して論ずることは意味がないだろう。とくに同書の第二部第五章「内心を表現する自由」を参照。
- * 19柿沼昌正・永野恒雄『「心のノート」研究』批評社、二〇〇四年が大規模に多面的な視角から展開する。三宅晶子『「心のノート」を考える』岩波ブックレットNO. 595 は、わかりやすく「心のノート」を読解し、批判する。島村輝『「心のノート」の言葉とトリック』つなん出版、二〇〇五年は、レトリックの側面から「心のノート」の文章表現を批判する。
- * 20野田、前掲論文、九三頁。
- * 21文部科学省編『「心のノート 小学校」活用のために』二〇〇二年。
- * 22三宅晶子『「心のノート」を考える』、六頁のわかりやすい表を参照。
- * 23鱒坂真「こころとは何か」、関西唯物論研究会編『唯物論と現代』第三三号、二〇〇四年、九頁。
- * 24リベラ『対話 理論と実践』あかし書房、一九八一年、二八、四九頁など参照。
- * 25 論文完成直後に、本誌『季報・唯物論研究』第九八号、二〇〇六年の特集「『こころの時代』と『こころ化』の論理」に掲載された四つの論文を読んだ。いずれも興味 深い論点を展開し、本論と重なるところが多いと感じた。
- * 26長谷川宏『森田式精神健康法』三笠書房、一九九六年などを参照。
- * 27エーリヒ・フロム『自由からの逃走』（日高六郎訳）東京創元社、一九七二年の「付録」参照。
- * 28ピーター・ラービ『哲学カウンセリング』（加藤恒男・他訳）法政大学出版局、二〇〇六年。なお名古屋哲学研究会編集『哲学と現代』第一九号、二〇〇三年では、特集「哲学カウ

セリングとは何か」を組んでおり、ラービの所説を中心に検討している。

*29ギムナジウムの教科書の翻訳として、ヘルツル/ミューレッカー/ウーラッハ『哲学の問い』（島崎隆監訳）晃洋書房、二〇〇二年がある。